

ことがらの時間的構造認識と時制使用について

川 上 三 郎

On Cognition of Temporal Structure of Event and Usage of Tense

Saburo KAWAKAMI

Abstract

Present tense in many languages does not only denote an actual event occurring at speech time but also has some usages that cannot be explained by a mere time relationship: generic and habitual usages. We show that these will be explained in terms of mental process in speaker's brain as a result of interplay of the memory of perceptions and experiences in past and perception at present time. We further exemplify how knowledge of a generic fact is obtained from a specific happening. This mental process explains why present tense gives strong reality to a sentence using it.

Next, we show that some Japanese past expressions must be considered as a result of interplay of memory and present perception, not as an expression of direct perception of a past event. This means that cognition of temporal structure in an overall flow of time plays an essential role. The same type of cognition applies to a German adverb "schon", too.

0. はじめに

時制の叙述や研究において、時間はこれまできわめて常識的とも言える取り扱いを受けてきた。つまり、川の流れのようにとどまることを知らない時間の流れ（ふつう「時間の矢」と称される）があって、すべてのものごとがそれに乗って流されていくものである。そして時間の流れは一本の直線で示すことができ、できごとが起きた時間はその直線上の一点として表記可能である。時制研究で研究の出発点としてよく取り上げられる Reichenbach の point of speech, point of event, point of reference はこの考え方に基づくものである。しかし現実の時制の使われ方を観察してみると上記の時間点の相互関係のみでは説明しきれないものがたくさんある。私は時制の用法の説明のためには話者の経験・知覚・知識・認識・判断といった心的過程が必要なのではないかと考え、その例をここに提示しようと思う。

1. 習慣または一般的意味をあらわす現在形

Dahl (1985)によれば世界の言語のすべてが動詞の時間的意味表示の範疇として現在形というものを持っているわけではないようだ。しかし、もしその言語に現在形というものがあれば、それは現在という時点で起きつつあることだけを意味するものではないだろうというのが、私の推測である。残念ながら私が理解できる言語はほんの少数であるので、それを証明することはできないが、その少数の言語の例をもとにそうではないかと考える根拠を提示することはできるのではないかと思う。

Matte (1989)は英語の単純現在とフランス語の直説法現在形の用法の類似点として

- (1) a. To make a verb process appear more real by making it contemporary to the moment of discourse
 - i) For dramatic effect in a sportscast
 - ii) For dramatic effect in historical narrative
 - iii) Where the verb process and the act of expressing it are simultaneous
 - iv) For dramatic effect in familiar exclamations
- b. To express or evoke fixed or static reality
 - i) Expression of the static mode of verb process
 - ii) Expression of the habitual mode of verb process
 - iii) The chronic mode of verb process
 - iv) The universal mode of verb process
 - v) In literary criticism or commentary on some past pronouncement
 - vi) To express a future certainty
 - vii) To express a very immediate past event

という項目を挙げている。ところが、これらはドイツ語の現在形の用法にも同様に多く見られるのである。Wunderlich (1970)が整理している現在形の用法をまとめると以下のようなになる。

- (2) a. Präsens in generellen Aussagen
- b. Sätze vom Sprichwort- oder Satzcharakter
- c. Präsens mit Gegenwartbezug
 - i) Aussagen über habituelle Akte
 - ii) identifizierende Aussagen
 - iii) performative Äußerungen
 - iv) normale gegenwartbezogen Aussagen
- d. Präsens mit Zukunftbezug

- e. Befehle und Instruktionen
- f. Präsens bei seit und schon
- g. Präsens für den Ausdruck von Vergangenen

両者を比較すればすぐ分かるように、分類の基準が元のところで違っているために、個々の項目の一致・不一致をいうことはできないが、それでもいくつかの共通項が見えてくる。さらに日本語の動詞のル形の用法を考えると、その共通項の中に入るものがかかなりある。たとえば (1 a. ii) は (2 g.) と対応するものでいわゆる歴史的現在の用法であるが、これは日本語でもありふれている。また (1 a. iii) は (2 c. iii) に対応する実行文の用法だが、これも同じく日本語にもある。例をあげると、

- (3) We accept your proposal.
 Nous acceptons votre proposition.
 Wir nehmen Ihren Vorschlag an.
 私たちはあなたの御提案をお受けいたします。

がある。また直接の現在に限定されず、かなりの時間の延長を含む意味をもつものに目を向けると、(1 b. i) と (2 f.) がある。例としては、

- (4) We live in Paris.
 Nous demeurons à Paris.
 We wohnen (seit langem) in Paris.
 私たちはパリに住んでいます。

というものがあげられる。ただし、この場合には日本語ではテイル形が用いられるので、少し様子が異なることになる。これは「住む」という動詞は日本語動詞の一般的性質として、単なる終止形として使うと起動相的な意味をもつことに起因していて、むしろ日本語の特殊性と捉えることができる。

ここで私が注目したいのは一般的・普遍的なことがら (1 b. iv と 2 a.) と習慣 (1 b. ii と 2 c. i) を表す用法である。一応それぞれについて文例をあげておく。

- (5) The Earth is round.
 La terre est ronde.
 Die Erde ist rund.
 地球は丸い。
- (6) He works for his father.
 Il travaille pour son père.
 Er arbeitet für seinen Vater.
 彼は父親のために働いている。

(5) のような恒常的な真実であることがらを表すとされる用法は一見何の問題もない、現在形で表現して当然のことであるように見える。また習慣を表す用法についても同じであろう。むしろ恒常的な真実と習慣とを同列に持ち出したことに奇異な感じがしたかもしれない。しかし私はこの双方の用法が人間の認識のありかたの同じ機構が背景にあることを指摘したいのである。

そのために、まずこれまでのようなあらゆる状況や文脈を離れた上記のような文例ではなく、現実世界の中で実際に使われた文からの用例を検討してみようと思う。

(7) Unlike us, he **didn't** cross at the corner. Instead, he **would** turn up the intersecting street and go about twenty feet from the corner, cross there, and return on the sidewalk to Brattle Street's sidewalk, where he **would** continue his journey. At first I **couldn't** understand this maneuver, although Misha invariably used it. Then I **saw** its merits, and **copied** him thereafter. Why *is* Misha's method safer? Because at any point along the block, traffic *comes* from only two directions instead of from four directions, as it *does* at the intersection. By crossing at midblock, one *reduces* one's chances of being hit by a turning car. (Elisabeth M. Thomas: The Hidden Life of Dogs)

これは Misha という名の犬が交差点に来たときの道路の横断の仕方についての観察を述べている文章である。途中まで過去形が用いられているのに、Why 以下が現在形に変わっている。それはそこまでが前半が Misha の取った行動そのものの記述であるのに対して、後半はその行動の方法についての評価であり、個々の具体的な場面を離れて、一般的な記述となっているからとしか考えられない。つぎに日本語の文例について観察しよう。

(8) 夏目漱石の『こころ』はぼくにとって長いあひだ謎めいた本であつた。子供のころはじめて読んだときも、大人になってから再三読み返したときも、妙に納得がゆかなかつたのである。もちろん漱石の作品はたいていの場合、謎めいた気配を漂はせてゐる。

(途中省略)

けれども普通の作品の場合には、難解さはいはば全体に薄く撒かれてゐて、さほど目立たないため、かへつて効果をあげることに寄与してゐる。ところが『こころ』の場合、事情は全く違つて、重要な一箇所がはなはだしく曖昧なため、狐につままれたやうな気持ちになるのだ。すくなくともぼくにとっては常にさうであつた。(丸谷才一「コロンブスの卵」)

このテキストでは最初に作者にとって『こころ』の理解しがたい点が子供の

ころから大人になるまで存在したことが述べられている。そこで過去の意味のタが用いられている。ところがそのあと漱石の作品全般に関わるようなこと、特定の過去に直接結びつけられるわけではないことがらを表現する段になって、テイル（てある）という助動詞が現れる。その最後に「なる」という現在形表現が用いられている。これは単にかつて『こころ』を読んだときにそのような気持ちにさせられたことがある、という過去の体験を示すものではなく、いわば読み手に特別の気持ちを引き起こす特質とでも言うべきものが『こころ』にはあるという意識が働いているのである。その後の「ぼくにとつては常にさうであつた」という文はこの現象が一般をはなれて、書き手個人にとって過去に起きたものとして提示しなおすことになるわけである。

- (9) Heute war der große Tag. Neunundzwanzig Tage lang hatte ich auf meinen zwanzig kostbaren Wildgänseiern gebrütet. Das heißt, selbst gebrütet hatte ich nur die letzten zwei Tage, die vorher hatte ich mich auf eine dicke, weiße Hausgans und eine ebenso dicke und weiße Truthenne verlassen, die das viel lieber und sachgemäßer taten als ich. Erst für die beiden letzten Tage also hatte ich der Truthenne die zehn mattweißen Eier weggenommen und in meinen Brutapparat gelegt. (Die Hausgans mußte mit ihren zehn selbst fertig werden.) Ich wollte nämlich das Schlüpfen der Kinder genau überwachen. Und nun war es so weit.

Wichtige Dinge müssen in so einem Wildgänsei vor sich gehen. Legt man das Ohr daran, hört man es drinnen knacken und murksen, und jetzt, ja jetzt hörst du ganz deutlich ein leises, süß flötendes »Piep«. Erst eine Stunde später hat das Ei ein Loch, und in diesem Loch sieht man das erste, was vom neuen Vogel zu sehen ist: die Nasenspitze mit dem darauf sitzenden Eizahn. Die Bewegung des Kopfes, mit welcher der Eizahn von innen her gegen die Eihülle gedrückt wird, bewirkt nicht nur ein Aufknacken der Schale, sondern hat auch ein Bewegung des zusammengerollt drin liegenden Vögelchens zur Folge, das sich auf diese Weise langsam und ruckweise um die Längsachse des Eies dreht.

(途中省略)

Meine erste kleine Graugans war also auf der Welt, und ich wartete, bis sie unterm elektrischen Heizkissen, das den wärmenden Bauch der Mama ersetzen mußte, so weit erstarkt war, daß sie den Kopf aufrecht zu tragen und ein paar Schritchen zu gehen imstande war. (K. Lorenz: Er redete mit dem Vieh, den Fischen und den Vögeln)

これは動物行動学者の Lorenz がカモやガンに見られる刷りこみをハイイロガンの孵化の際にはじめて体験するくだりの一部である。上に取り出した部分の

テキストは卵がまさに孵化しようとしているところから始まり、途中、ガンの卵の孵化の際にはどのようなことが起きるものかを読者に伝えた後、また元のハイイロガンの卵に視線を戻すという構成になっている。時制に注目すると過去形および過去完了形で文章が始まり、途中現在形に切り替わり、また過去形に戻るといった使われ方がされている。現在形に切り替わった最初の文章の中に *in so einem Wildgansei* という語句があり、その前の文中の *die zehn mattweißen Eier* という定冠詞付きの語句とは明瞭に対立して、その文が一般的なことから述べるものであることを強く表している。このように個々のできごとを離れた、いわばどの時間においても成立しうる一般的なことから過去に拘束されるものではない。また未来の領域に属するものでもないで現在形が用いられていると考えることができる。また現在形は表現することがらを読者の中心にいきいきと現前化させる働きがある。面白いことに現在形のコンテキスト中に *jetzt hörst du ganz deutlich ein leises, süß flötendes »Piep«* という二人称主語の文があり、それまでの人を示す主語が一般的形式主語 *man* であったのとは異なり、大いに目を引く。この文は提示されていることがらの中に読者をまさに引きずり込むような働きがあり、現在形の現前化の機能が発揮されていると言えよう。

ここまでのところをまとめてみると、具体的な個の関わった特別のできごとに対しては過去形表現が取られているのに対し、個を離れた、いわば類の関わる一般的なことから表現するときには現在形が用いられると言える。(7)であれば Misha の行動は、それがどれほど繰り返されていようと、今はもういない犬の行動である限り、過去形で表現されるのがふつうである。それに対し、その行動の手法は個を離れた抽象的なものになっているがために現在形で表現されることになるのである。(9)の場合には *in so einem Wildgansei* という語句が個々の卵のことではなく、ガンの卵一般について言えるということを示すために不定冠詞付きの名詞によって類を提示し、これによって一般的言明であることを明示しているといえる。言い換えると特殊あるいは具体的な事例は過去形で、一般的あるいは抽象化された事例は現在形で表現するという図式がこの場合に当てはまっている。

次に過去のデータをもとに一般化した表現が作り出される例を眺めてみよう。

- (10) Scientists are still piecing together the details of what **happened** when comet Shoemaker-Levy 9 **collided** with Jupiter in July 1994. The final data playback from Galileo, covering onboard observations of comet fragments R

and W, was completed in late January of this year.

Collision events have thus far been divided into three phases: The incoming comet fragment first *hits* the Jovian atmosphere and *heats* up (the "meteor" phase), then *explodes* into a fireball of extremely hot gas (the "fireball" phase, see figure). The gas *backflushes* out the tunnel cleared by the incoming fragments, and the gas and debris *expand, rise, and cool*, forming the plumes seen above the Jupiter limb by the Hubble Space Telescope and ground-based observers. Then the plume ejecta — a mix of cometary and atmospheric material — *fall* back toward the planet, heating the atmosphere and producing intense thermal emissions (the "splash" phase).

(NASAジェット推進研究所シューメーカー・レヴィー彗星WEBページ：<http://www.jpl.nasa.gov/sl9/gll29.html>)

シューメーカー・レヴィー第9彗星の木星への衝突は過去のできごとであって、過去形で表現されている。ところがその観測データをデータを解析して、衝突がどのような過程を経て展開していくのかを細かく分析したものを提示する箇所に至ると現在形が用いられる。これは彗星の21個の破片が時間を前後して衝突した過去の個々のできごとに対して、衝突の現象がどのような経過を経て起きるものかを総合的にまとめて提示したものとしたいからであり、過去の一回の事象として理解してほしくないからだと考えられる。

それではなぜ現在形が一般的意味を表現するのに用いられるのだろうか。時制に関する議論で行われる説明としては、現在形は無時間的（つまりすべての時間の意味を持ちうる）とか unmarked な、あるいは default の時制であって、他の時制を使うことが不適切な場合には現在形が用いられる、というのがある。それはそれで論理としては成り立つのだが、現在形のもつ現前化のニュアンスが捉えられず、私には不十分な気がする。私は現在形の意味の説明には人間の認識のあり方、そのものを考えねばならないのではないかと思われるのである。

ここで一般的なことがらについての知識という側面に目を向けよう。Russel (1951) は「知識」についてこう述べている。

There is another thing which it is important to remember whenever mental concepts are being discussed, and that is our evolutionary continuity with the lower animals. "Knowledge", in particular, must not be defined in a manner which assumes an impassable gulf between ourselves and our ancestors who had not the advantage of language.

この言葉はヤング（1992）が次のように述べていることと軌を一にしている。

人間の知識は、生きるために情報を収集するという、すべての生物体にとって本質的な過程が特殊なかたちで発達したものとしてとらえることができる

つまり知識はたとえそれが人間の言語の形でのみ表現可能な複雑なものであるにしろ、それを習得するに至る過程は人間以外の動物と本質的に変わるものではないはずだということである。そこで人間がほとんど動物と同じレベルで知識を獲得するような状況を考えてみる。

子供が何気なしに道ばたの草を折り取ろうとしたところが、それが運悪くすずきだったとしよう。十分注意すれば大丈夫だが、うかつにその葉を手の中で滑らすとすずきの葉はかみそりと変わらないほど鋭く皮膚を切るのである。そのためにひどい目にあった子供は次回からはすずきに対して用心するようになるであろう。すずきを素手で取り扱うことは怪我を負うことになりかねないということを知ったからである。つまり、すずきで手を切ったというできごとを過去のものとして単純に記憶するよりは、すずきの取り扱いを誤ると手を切ることになる、と一般化した形で知識として持つておくことの方がこれからの行動で身を危険にさらすことが減り、生存上有利になるわけである。この知識はもしその子がすずきを見れば直ちに行動に適用されるであろう。つまり起きうることがらへの想起作用、現前化の働きは強いものでであろう。その点でこの知識は現在形で表されてしかるべきものとなる。一方その知識は習得以降、将来にいたるまで有効なものとなるはずである¹。つまり知識となった一般化されたことがらは時間的な枠組みの制約を受けないことになる。その意味で無時間的といっても差し支えはないかもしれない。

過去の経験からの知識抽出に関して想起されるのは Tulving（1985）のエピソード記憶と意味記憶の学説である。それによれば記憶にはエピソード記憶と意味記憶の二通りがあり、個々のことがらを記憶するエピソード記憶は時間が経つにつれ細かい部分が忘れられて、もとのことがらの重要な根幹部分をのみ記憶する意味記憶に移行していくのだと言う。つまり大脳には個々のできごと

1. もちろん経験から得られた知識が常に適切なものとなるわけではない。ことわざに「糞に懲りて膾を吹く」というのがある。これは一度の失敗に懲りて、不必要で無益な用心をすることのたとえだが、一回の失敗を元にして身を守る知識を得たものの、そこに不適切で過剰な一般化があることを揶揄しているわけである。このときはさらに知識の修正をする必要となる。

を抽象化し、一般化する機構がそなわっていることが心理学の面からも明らかにされているのである。

習慣の意味についても、その表現に至る過程は上の一般化された知識の場合と同様であると私は考える。たとえば「彼はたばこを吸う」という習慣表現を例に取ろう。この文は他人から教えられたのではなく、自らこの文を作りだし、発話されているとする。発話する人は彼が今たばこを吸っているところを見て発話しているわけではない。その場合は「彼はたばこを吸っている」となる。この習慣表現も過去の経験に基づく知識なのであって、話者は彼がたばこを吸う場面を過去に幾度か目撃していて、そのことから彼がたばこを吸うというできごとが現在でも、また未来に大いにありうることであるとの認識に至ったと見るのが妥当なところである。なぜならたばこを吸うという行為は通常、偶発的になされるものではなく、1日に数度、それを毎日繰り返すものだという体験的知識が片方にあるからである。

(6) であげたような文例についてはすこし事情が違うかもしれない。この場合には彼本人かその周囲の人から教えられたことが出発点となるのが普通だろう。それはもちろん過去のことだが、1年前なら十分ありうることだろうが、10年前に聞いたとしたらそう言うだろうか。3年前ならどうだろう。どう表現するかは話者の判断することがらで、心理学的な領域の問題であろうが、いずれにしる過去に得た知識に対して現在形を用いる際の判断の基準は、そのことからの持続性にあると思われる。一過性であると判断されれば、すぐに現在形を用いることはなくなるであろうが、持続性の強いものと判断されれば、それを聞いたのが遠い昔のことであっても現在形を用いることになるであろう。

- (11) a. A氏とは10年前に会ったきりですが、とても背が高い人ですね。
? b. A氏とは10年前に会ったきりですが、とてもやせてますね。

aの文は十分に可能な文であるが、bの方はあまり言えそうにない。それは人の属性のうち、背丈はそうそう変化はしないが、体型はそうでもないため10年たった今でも昔の体型のままの保証がどこにもないからである。一方、もし話者がA氏がもはや存命していないことを知っているならば、aも言われなくなり、「とても背の高い人でしたよ」と過去形になる。それはもはや現在の世界において成り立つ事実とは見られなくなるからである。

- (12) a. A氏の家には半年前に遊びに行きましたが、庭には大きな柿の木が植わっていますよ。

? b. A氏の家には半年前に遊びに行きましたが、庭には大きなひまわりが植わっていますよ。

樹木のようなものは切り倒されたり、何かの理由で枯れない限り、かなりの年月その場に立ち続けているものであるのに対し、草花は半年も立てば様子がすっかり変わってしまうものである。そのためにbのような文は奇異に感じられるのである。このように現在の世界についての記述を過去の経験をもとに行うときには、ものごとのありようが判断を左右し、それが時制選択の際に重要なファクターとなるわけである。

以上をまとめると、現在形の用法のうち、実行文と直接現在起きつつある事象の描写を除けば、大半は過去に得られた経験と知識をもとに、現在の世界についての認識全体をそこに適用して表現されたものである。単純に時間軸上のできごとの時間と発話の時間との相対的な関係によってのみ把握できるものではないのである。

2. 過去の記憶と現在の認識にもとづく言語使用

ここまで過去における知覚、体験、認識、そしてその記憶から現在形表現が導き出されるものを見てきた。今度は現在における知覚・認識から過去形による言表がなされる場合があることを見ていくことにしよう。鈴木(1979)はタ形とテイル形とが同じ事態に対して双方とも使える場合のことを次の文例を挙げて言及している。

- (13) a. この山小屋はいたんだね。
b. この山小屋はいたんでるね。

これはいたんでいる山小屋を見かけたときに発せられた文であり、「aは以前のいたんでいない状態からの変化をふくんでいるが、bはかならずしもそうではない。はじめてみた山小屋についてもbは可能であるが、aは不可能である。両方とも『このまえきたときからみると』という条件と共存できるが、『現在』『あいかわらず』などとはbしか共存できない。」と鈴木は述べている。

aについて「以前のいたんでいない状態からの変化をふくんでいる」とは、話者がそう発話できるための条件と捉えなおすと、話者は必ず以前の山小屋の状態を知っていなければならないが、山小屋がいたんで行くところを必ずしも目撃する必要はないことに注目しよう。話者は記憶している過去の山小屋の状

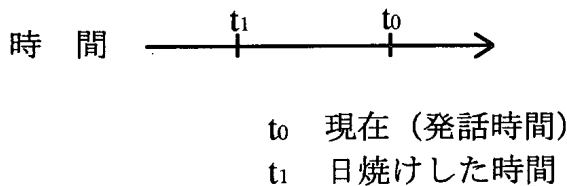
態と現在の状態とを比較して、「いたむ」という事態が過去において起きたという形の表現を取ったのである。類例として、真っ黒に日焼けした人に対して発せられる次の文例を検討してみよう。

- (14) a. ずいぶん焼けましたね。
- b. ずいぶん焼けてますね。

初めて出会った人に対しては(14b)は使えても、(14a)を言うことはできないのに対し、一夏会わなかった知人に対しては(14b)を言うより(14a)を使う方が普通だろう。ここでも「焼けた」という過去表現は話者による直接体験ないし他人から教えられた知識などではなく、前の状態と今の状態との差異を認識したことに基づく事象表現であることに注目したい。

つまりここには時間軸上に厳密に同定可能な「できごとの時間」などというものを設定する必要はないのである。図式化して示すと

(15)



という時間的知識の背景からの発話ではなく、

(16)

t_1	...	t_2
肌が白い	→	肌が黒い

時間的に t_1 は t_2 に先行する

という認識をもとに話者が(14a)を発話したと考える方が、現実の言語使用状況を考慮するならば適切なのである。

さて(16)を一般的な図式で表示し直すと

(17)

t_1	...	t_2
~A	→	A

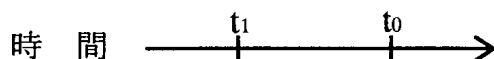
となるが、このような時間的な事態の変化に対応する意味がドイツ語の schon に含まれていることを指摘しておきたい。schon の辞書的な意味はいくつかあ

るが、そのうち時間的なものとして Duden の Das große Wörterbuch der deutschen Sprache は最初に次のような語義を与えている。

drückt aus, daß etw. früher, schneller als erwartet, geplant, vorauszusehen eintritt, geschieht od. eingetreten, geschehen ist

そして例文の最初に sie kommt schon heute という文が挙げられている。上の語釈に従えば「彼女の来るのを例えば明日と思っていたところが、今日になった」というニュアンスを表すということになる。これを上記の語義を図式的に表示するとすれば

(18)



t_0 予期していた時間

t_1 実際に来る時間

となり、(15) と非常によく似た時間構造を与えようとしていることが分かる。ところで schon は状態を表すフレーズ（例えば sein + 形容詞）と共に用いることができるが、そのとき変化を表したり、少なくとも変化を前提とする文となる。

- (19) a. Meine Mutter ist schon tot.
 b. Die Ampel ist schon rot.
 c. Ich bin schon müde.
 ? d. Die Erde ist schon rund.
 ? e. Der Mann ist schon jung.

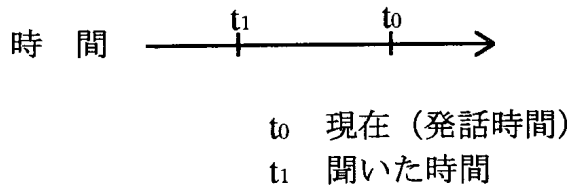
上記の文例中、過去における状態の変化が含意されうる a, b, c については何ら問題はない。たとえば b を例に取れば、交通信号が先ほどまで青だったものが今は赤に変わっているという意味がある。これに対し d は奇異に聞こえる。なぜなら地球は恒常的に丸いものであって、別の形から今の形に変わったとは理解されていないからである。e もおかしく感じられるが、それはわれわれの有する年齢についての時間的推移の理解とこの文の意味しようとするものが合致しないからである。つまり (17) の図式のような時間的推移が schon の意味には前提となっており、これらの文は時間 t_2 で状態 A にあることを意味するものと考えられる。そのため $\sim A$ （正確には A の前段階）を前提とすることのできない d, e は奇異に感じられることになるのである。

ところで schon は経験を表す表現の中でも用いられる。たとえば次の文例の a がそうである。

- (20) a. Von ihm habe ich schon gehört.
 b. Ich habe von ihm gehört.

もし Duden の提示する schon の語義を (20a) に適用し、それを (18) のような図式によって表現するならば次のように表せる。

(21)



しかし、(21) だけでは schon を用いる理由にはならない。schon を含まない (20b) の場合にもそのまま当てはまってしまい、両者の差異を説明しないからである。やはり (20a) にも (17) の図式で示されるような意味の枠組みが当てはまって、後時間の状態または状況 A が明示的に意味されるものとなっているのではないだろうか。つまり (20a) は「彼について聞いたこと」を単に過去のことがらとして提示するのではなく、聞いた結果の現在の知識の状態をむしろ提示したいのである。

参考文献

- Dahl, Ö. (1985) *Tense and Aspect Systems*. Basil Blackwell, Oxford.
- Duden. (1994) *Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in 8 Bänden*, 2. Auflage, Band 6: Poz-Sik. Dudenverlag, Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich.
- Fabricius-Hansen, C. (1986) *Tempus fugit, Über die Interpretation temporaler Strukturen im Deutschen*. Pädagogischer Verlag Schwann-Bagel, Düsseldorf.
- Fuchs, C. et A. Léonard. (1979) *Vers une théorie des aspects, Les systèmes du français et de l'anglais*. Mouton, Paris, La Haye, New York.
- 金田一真澄 (1994) 『ロシア語時制論 — 歴史的現在とその周辺』三省堂
- Matte, E. (1989) *French and English Verbal Systems, A Descriptive and Contrastive Synthesis*. Peter Lang, New York, Bern, Frankfurt am Main, Paris.
- Miller, G. A, P. N. Johnson-Laird. (1977) *Language and Perception*. Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts.

- ナイサー, U. (1978) 古崎敬・村瀬旻訳『認知の構図 — 人間は現実をどのようにとらえるか』サイエンス社 (Ulric Neisser. *Cognition and Reality, Principles and Implications of Cognitive Psychology*. W.H. Freeman and Company, San Francisco and London, 1976)
- ナイサー, U. (1988) 富田達彦訳『観察された記憶 — 自然文脈での想起<上>』誠信書房 (Ulric Neisser. *Memory Observed: Remembering in Natural Contexts*. W.H. Freeman and Company, San Francisco and Oxford, 1982)
- 太田信夫 (編) (1988) 『エピソード記憶論』誠信書房
- Prior, A. (1968) *Papers on Time and Tense*, Oxford University Press, Oxford.
- Rescher, N. and A. Urquhart. (1971) *Temporal Logic*. Springer Verlag, Wien, New York.
- Russell, B. (1951) *Human Knowledge, Its Scope and Limits*. George Allen and Unwin, London.
- 鈴木重幸 (1979) 『現代日本語の動詞のテンス — 終止的な述語につかわれた完成相の叙述法断定のばあい』言語研究会編『言語の研究』むぎ書房 pp. 5-59.
- タルヴィング, E. (1985) 太田信夫訳 『タルヴィングの記憶理論 — エピソード記憶の要素』教育出版 (Endel Tulving. *Elements of Episodic Memory*, Oxford University Press, Oxford, 1983)
- ウィットロウ, G. J. (1976) 柳瀬睦男・熊倉功二訳『時間 その性質』文化放送開発センター出版部 (G. J. Whitrow, *What is Time?* Thames and Hudson, London, 1972)
- Wunderlich, D. (1970) *Tempus und Zeitreferenz im Deutschen*. Hax Hueber, München.
- ヤング, J. Z. (1992) 河内十郎・東條正城訳『哲学と脳』紀伊国屋書店 (J. Z. Young. *Philosophy and the Brain*, Oxford University Press, Oxford, 1987)
- Zemb, J. M. (1984) *Vergleichende Grammatik Französisch-Deutsch, Teil 2. L'conomie de la langue et le jeu de la parole*. Bibliographisches Institut, Mannheim, Wien, Zürich.